

## 花壇用の新品種わい性久留米けいとうの育成について

松川 時晴・柏木 征夫・小原 昶<sup>\*</sup>・菊本 忠士

(福岡県立園芸試験場・\*山口県普及教育課)

MATSUKAWA, T., KASHIWAGI, I., OHARA, T. and KIKUMOTO, T.  
On the Breeding of Celosia Cultivar "Dwarf Kurume" (*Celosia cristata* L.)  
for bedding plant.

わが国の花き園芸は切花生産を中心に発達してきたが、現代では花壇などの厚生花きが必要となり、その改良、研究が期待されている。

本報告は高性の“久留米けいとう”と“わい性とさかけいとう”との自然交雑により発現した“わい性久留米けいとう”の育成経過と特性を明らかにしたものである。“久留米けいとう”は昭和20年に八女市の大月留吉がインドから持帰った濃赤色、球型の高性種で、同25年に久留米市の案内茂利が切花栽培で好評を博したものを和田浩志が命名、以来、全国で栽培されて切花用の中心品種となったが、在来のとさか型との雑交による形質劣変が著しかったので当場で選抜を重ね、昭和36年に優良種子を県内に配布した。その間に本種を見出し育成したものである。

## (1) 育成経過

昭和33年に“久留米けいとう”( *Celosia cristata* L. cv. *Kurume* ) 9 品種、“わい性とさかけいとう”( *C. c. L. var. nana Hort.* ) 3 品種 ( *Toreador*, *Empress* および咲き分け )、“ふさげいとう”( *C. c. L. var. Plumosa Hort.* ) 2 品種、“やりげいとう”( *C. c. L. var. Childsii Hort.* ) 3 品種を隣接栽培し、“久留米けいとう”だけから個体別に採種・栽培した。

第2年目はすべて高性の“久留米けいとう”であった。第3年目において32系統、約2,000個体のうち、花冠の色、形はきわめて不良ではあったが、わい性で久留米型の葉型をもつ、紅紫色赤葉、淡黄色黄葉および鮮黄色青葉の3個体を見出し個体別に採種した。第4年目にはわい性株中に“わい性とさかけいとう”の葉型を示す数個体が出現し、自然交雑が認められたが高性株は出現しなかった。さらに別の高性株の中から赤紫色、黄色、咲き分けの6個体を見出した。第5年目に赤色、赤桃色、黄色、橙色、咲き分けおよび白色を分系した。特に赤色、赤桃色、

黄色などはわい性の久留米型でほぼ固定した。第6年目には紅色、紫色が分系された。花冠は径8~12cm、茎長17~28cm、葉数45~111枚でややわせであった。第7年目には赤色系を中心に青葉、わせ、巨大輪などを分系した。第8年目には赤色を濃赤色(巨大輪、ややわせ; *Toreador*の形質をもつ)と緋赤色(花冠のしまりよく、花首が短い; *Empress*の形質をもつ)に分けた。第9年目には側枝を出す系統を分系、幼苗検定で赤葉率は18~27%程度で花色別に差があった。しかし幼苗時に青葉であっても赤葉または赤斑のキメラを生じる個体があった。第10年目で幼苗の赤葉率は0.035%、半赤葉率は0.048%、高性株率は0.036%以下となったので“Orient”と名づけ、1号=濃赤色、2号=緋赤色、3号=濃赤桃色、4号=黄色、5号=橙色、6号=濃赤色で超わい性、と仮称し、昭和42年12月に種苗名称登録に出願、同45年7月に“Orient 2号”(第225号)が名称登録され、一方、同43年1月、“Parade Crimson”などと命名して全米審査会に出品した5品種がいずれも入賞した。育種上、育成過程で採種期が遅れると多葉、晩生化しやすいので早期採種が必要と思われた。

遺伝的にはF<sub>2</sub>でわい性株を発現し、固定が早く、わい性は劣性因子と考えられる。花色では赤色系以外は赤と桃と橙、赤桃と黄などの咲きわけからの選抜が中心で赤桃、黄、橙の各色の固定が困難であった。わい性とさかの血は花冠の大きさ、種子量、葉型などに認められた。

## (2) 特性の概要

“久留米”に比べ葉はやや長く多葉で、茎は太く20cmのわい性、花冠は径10~15cmでしまりよく、花首が短い。1個体の種子は500~1,000粒が多い。日長は16時間が限界日長で極度に晩生化し、15時間以内で短日ほど早咲きである。4月まきが早咲きとなる。